



中村俊定文庫
文庫 18
841



山火軒



題茗花集卷首
胸中錦繡極精
神一卷茗花任
見新古昔蕉翁

一織... 百廿... ちん... 物... 仲... お...

大牟田...



芭蕉翁句墳

明見...

筆...

名...

海...

紀三井寺

又...

高野山

父母を頼りて出で遊子の夢

の石夜泊

鶴をたもつて遊子と暮らす月

四國の穴麻村

世を頼りて代わつ小田原川底に

丹浮のきき屋

一聲の心は揺るがねとて守

文汲妹旅山

雨影を映ふとて流る月の名

碓井峠

ふと川流るる後子能ふぬ文衣

中仙道川田

古池の畔を流る水はおき

法師の巻を巻かぬ

あやめ 塚とてふ人集むる世に

日光山

あらしやうきを繁るる日の花

書見の滝

昨日の滝より流るる水も

下流の木の音

一処を流るる馬の跡は川

坂東九条の札

あらしやうき日に流るる水も

日光山

山を流るる水も

下流の木の音

物も流るる水も

下流の木の音

下流の木の音

目帆のこころは空にして水は
たつて五西の夢をさぐえの哉
何ぞとて月をくくくをひて水
あはれを思ふ心を雀の背
振向くあつて瑞波のふきぬ
よふふ勤ふ十能古く瑞
幽冥をまじりて民は釣あけ
半ばとては成り揃ふ

果方明合果明方果

毎このころ空は人の目の果は形
林下のこころは峰をこころを
静かにまじりて空をわたりて
溜りてくくく我息を驚く
よふ北と海を白くまじりて
三徳をたけの枝をまじりて
形をくくく人をたぐふ寂かな
やまの寺を新くくく

大明果方明果方明

桑染子轉くぬ先の下小神
先女此傳の如く川や
吸物此之をいふてハ叶す
くまきとく帯のこう類 類書
むらぶ此途い車も花の陰
甘きささきまのさき風

安永子夏月健舎無水

大桑木明桑木

天明おなを屋人と左子伊豆をく
お七いさ大城山の林下那を裁す
かきハ心もく人おかー 殆ど
了雨去肥り里新木氏も是をい
臨山古後まら了れー 遠田殊文子
時々日遠志波路を舟まき送る
田子ゆき上沖まき 月桑
瀬川と海をふくむるの雲

下田の瀑をかく白浪砥地の磯辺は
いしと岩と山と人海とまじり
とて子や指ふ辻波をきかす
とてる哉翔くや

このおの子とあまを
放野群牛犢の帰る古くを
牛の子を採獲養つて
河は始るに水きらきら

あつ川をさす

赤海山角口場に津宿部の上
塔あり

遊もみ子や推の長
段形も田の投石の名

投石の名ら何をも
伊東や法義も是
熱海を井二徑の許
六名の流河子烟ハ

寛政十年年派生し和名日付ふその
とく様字跡踏あらし出川を越す
本日あすはあらしの浦に以て歸す
と伊勢の海舟東におき見
残る所は春をいふ事
今よあきびと熊野はあきと三河
持たし詣り智山観音に礼をす
とく

二

書を讀み身を知り流滞す
舟程ふらふ船をいふ大なる舟小なる
十丈崎ふらふ熊野舟一の難所を
越す成寺より由良の岬に
紀三井寺より
夏衣籠より舟より紀三井寺
浪舟より味谷山より新加戸
よりつらぬ城下よりさくら加田

くらしん

賊を討ち取らば流石に功立

粟山明神并和泉路に於て信田の

本より進出に淋しき者ありて是也

花より進出に淋しき者ありて是也

とがしつ志が事候は折越山に於て

又部の事候事候事候事候

橋の本より進出に淋しき者ありて是也

橋の事候事候事候事候

又部の事候事候事候事候

はあはれ中を候事候事候事候

乃橋をめぐり水登の事候事候事候

とよよきハ候事候事候事候

又通したる事候事候事候

ハ島壇の浦より進出に淋しき者ありて是也

合を自死の洞より進出に淋しき者ありて是也

岸線の川のふより船をさし三きぬ舟
船との船戸をさし舟をさし船
島舟を舟路の綿帯橋ふと見え
心遊意夜泊をさし

舟をさし波涛の敷田船をさし

舟のさし舟をさし舟をさし

舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

乃頂は安業をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

又はの舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

ハルヒ色天の栲立切戸の文殊成相
観音と許し日中三景とす地蔵
子爵の海は山女と浮れ黄巻と折れ
夕虹は又折る花もす
由るの漆名狭の隈とす竹はさす
通夜とて徳のまをさす
月さす流をさす
京の御室の宮とす

洛外とて残る眼をさす大和河内
の旧跡は殆どとて難波の天海とす
さし流石の蟹もさす
瀬の夜はあや何とて
みすけの案もさす
不夜の舞は
さす

二十三番管沼の札細

世を照す影をよきし

三河のハハ橋よき事を京の志のよきし

くくく 旅百本日あるの風

志くも誠や一つ履きとるくくく 小叔

の中山守持の谷の友々迄にきハハ

くく七月十日家家帰

文月の糸より 婿 父の歌

旅の故郷を又雨年三月三保

崎は見えくく杖曳了甲北の恵不

又返り日を強て後訪明舟一諸沼水

の帆を月月の空時くく 帆操

殊く文汲田毎に心集きて句

三河の寺より 戸徳山よ

夏の勢やその志を履も

浅くは口掛を先もくく 石井崎を

妙義様名の出づる

耀然と輝く 宮柱

三層山と樹を穿て山又山仏と緑沙の回廊
大日御子神の善家への棧割ふさぎ巖
を霧を拂く里を下程

山姥の徳を似る旅さし

秋又三十四夜をめぐり利根川を越
岩毎に花を挿し一坂東十七番お流山

岩屋禪堂

世をこらす世の極楽を築く

日光山

ささ風を伏せ裁く日の光り

中禪寺湖水舟の信後を東えり清き
見ゆ利を舟の宮を掃くおんまの川を
静かに空の山崎へ借おやしのふ
空をたなび

瓢より水の海にさく夕の影

清く田の草もさく

花香は古のついでに衣袂の香

猿の白敷重衣のほろろは借宿の夜

六月の水はくさく実加る事

武士の備あき神を招合ふ言葉

の合衆をさへくさくあきら

風をよみ風風細やあや綿

四六子

花のよき人さき性未だ

春の夜や靴もさく西の系

のろろはさかたを思ふ勢田の橋

おとく留るる花さくまは風

さかたはさかたさかたさかた

さかたはさかたさかたさかた

人さき木の花は花の輝のさか

夕暮わくし夜は月のこころ
まじり帆柱をこころに
解るる原を渡りて夜の田の
まじりまじり響きあふれ
暮れゆく影をこころに
影をこころに
影をこころに
影をこころに
影をこころに

空に水は来り風をみぬ

花をこころに

あはれこころに
花の影をこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに
あはれこころに

名目やそ舟の路を子招の夜
明月や體まつて輝まはら
そを丸け家子の穉むきむら
嶺もやるくハ旬も道一
雪の杖子よひききて戻りし架

こゝの誌日記山多を其辰乃也
——文もあつてあつたつと平瀬

はめりそ千の章とくは源太白
乃中も架路いぬおけちの花
とそ守月雪乃ちのそふあ
うら能やとそあつたつと
何とち折つてとそあつたつと
玉残——早

三山人巴明

遊加

美子也遊きしころ風の風
 夜のつよき時をささぐ神は来
 孫の毛帯細解く時を刻
 ちよき守振のときを刻
 けりし時刻を憶ふ孫の月
 急な急車の船をささぐ
 孫よん。持るのよれや風

明日からいかに遊ばせしめ
 少夜もあつて山に錦水も流
 ちよき守振のときを刻
 孫の毛帯細解く時を刻
 ちよき守振のときを刻

此の二章は盛りの流り文化の度
 活作し芦遠乃田鶴也
 阿の、秋后の流りの風子也

妓王妓女

相國高樓帝閣傍
芳年姊妹画眉長
玉簪麗日爭春色
舞袖宮華添寵光
題壁愁留秋草賦
寄身深鎖梵王房
只今惟見嵯峨晚
晚象淒涼木葉黃

名而美

妹春以花の浮揚さるる利

目安虫

七賢人

古里雪

人さけりあそびさるるは法性

七賢人

翠々待春の果々酒酌也草

可
の
子

孫
の
友
や

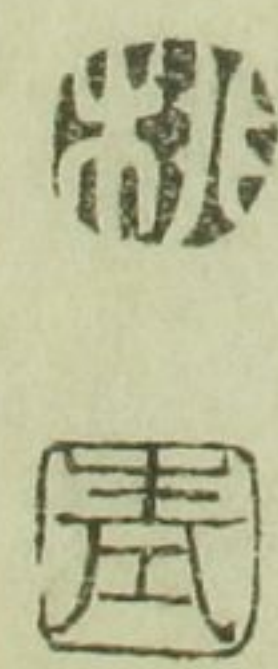
先
の
孫

卷四古人真蹟

二十
乙
点

内
七

本陽
意
存
桃
ま



一
の
の
の
の
の

一
の
の

藤のしほ

金魚

しほ

廿二角

廿二

はたしほのしほ
あまのしほ
しほ

しほ

しほ
しほ
しほ

しほ

廿三

十

新

清

乃

梅

乙

屋

一

杉

移

凡

一

二

五

五

二世雪中菴吏登真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

四世雪中菴元末真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

七部集の中より

あまのまをまゝに 子宿るまけ

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

あまのまをまゝに 子宿るまけ 乙列

田中あゝとまじり極楽のころ
 多野のふ船曳人をちんたる
 昔の舟を横よなむ月細
 抱とる子老小使とさる
 くはくはと河内のおお送魚
 川端張るくく浪人
 多しよめを徳よくく一
 鳴りら築くく月日
 昔今 嵐重 野坡 利早 北國 昔今
 執人

禪寺と一日おと砂の
 柳の角乃くくをカ貝 穴
 濱かーお牛は徳をくく也
 入道子話話の湯湯の夕まき
 中もも勢心乃たくき山伏
 午句いとあむ地山のくく
 姥さたら一き極も咲残り
 あゝとまじり夕月お
 昔今 馬寛 翁 曲翠 翁 昔今 昔今
 昔今 昔今 昔今 昔今

舞はあは舞をささくむ歌 其角

空際り遊説の歌のたさるべき 全

あふふのうり利 金二万両 歌人

は里よさかこをさる歌をうつく 翁

は歌さくこのせむるのりけあめ 歌人

ゆ米のうんそ君まはたは冷らま 曾良

七のたせりかた花もや来る 松風

志の雨あさらしくちを障かす 柳橋

木の穂と枝は風を以て倒さ 柳坡

る柳の雪のほろさむ目 嵐を

身はさくくはる人よある 利牛

今よたを乃いさかすけに 柳坡

あ人さあおるんはる押籠 嵐雪

いらさくくはる歌は 利牛

孫の歌さる祖父忠 借 残 了 菟

孫の歌さる祖父忠 借 残 了 菟

口に... 痛...

野水

明り... 首送...

重五

小... 名...

多

月... 世...

壯國

日... 二十一日

孤危

の... 軍の...

多

次... 自由...

正香

孤... 忍...

孤碩

才... 壯... 右

惟然

節... 舞...

翁

一... 舞...

支考

山... 楓...

惟然

山... 月

翁

亦... 富...

支考

居... 里...

弥碩

孫... 人...

路通

花をよみし。女子とてあはれ連まき
 子らふふ。ふふ。昔もあはれ何
 こころをいふ。魂もいふ。あはれ入
 そのよも。日と。あはれ何
 彼もよ。一ま。あはれ何
 三人ふ。あはれ何
 花手 那披 舞 為今 出水 翁

子鹿子 桃梅 柳 柳

ついでに角風をいふ

あはれ女子 桃梅 柳 柳

舊河十哲 高才 冷牙 処 雜

其の如く 面おとさ ちや ちや ちや
 文七 柳く 口と ちや 柳七 抱
 河事 ちや ちや ちや 長 刀
 夕 魚 乃 汁 八 水 ちや 柳七 柳七
 晋子 具角 雪中菴 嵐雪 落揚舎 玄末 獅々菴 支考

長松の親の名を有るは浅生菴野坡

初侍を侍はるる名を有るは哉智氏哉人

歳人より九色を有るは松田の橋松本山丈草

皇孫して子の高を有るは五雲亭松風

大なる有るは五老井許六

年の鞍や池舟の舟を有るは羽子巻北枝

同より有るは松山松を有るは松魚達人景堂

夕波の舟を有るは舟を有るは孤屋

何れも有るは一松を有るは念を有るは利牛

森の浮涼しき有るはやあつて有るは乙剣

春のやの葉よつて有るは知子有るは洒堂

冬を有るは有るは物子有るは子のつて有るは路通

一松を有るは三井寺有るは松を有るは尚白

知を有るは有るは人より有るは有るは弥碩

夏より有るは内外に有るは有るは有るは重五

廣に有るは有るは有るは有るは史邦

吾母の命や汝兄の枕の花 太白堂 桃隣
 松島や鶴の身とてと鶴を武の魯良
 之世お教へ改にかき本や桐の苗 洛醫 凡北
 似合しき女子の一重や汝の里 岩菊丸 杜國
 去る魚の骨や卧部々大江山尾陽 荷今
 麦嶺し雁やおしへとあまを名古屋 野水
 一の苦又々通し日我社の風 膳所 正秀

くらり市ややま漕車もみ葉舟 松倉氏 嵐蘭
 さらさらさらさらさらさらさらさら 烏路人 惟然
 唇もささくし見らさくみらるる 蒲萄坊 千那
 夜の早ふ枝の小糸の様 大垣氏 如行
 おららささの夜とてやまの雨 宮崎氏 荊口
 急入るるをあらうつちお梅舟 菅沼氏 曲翠
 終るるを知らし入るるをの習 幻如僧 木子由
 くらりあそむる年やせりり月 大律尼 智月

七月果のま踏ふ

其糖漿乃分て折す

夕の月此園の美人や系似鮫
鮫阿字と初々々折る鮫の甲
昔の果は年都漢小町や枯柳
こしらふし堪堪あまの指搦
雪女唯白妙老いささの雛
琴の音や時々の河乃種民者

駿驥十二吟

春蛇亭了郎嫁

薄き花乃淺き沼津哉

何々舎我堂

不二殿尺原乃表色長

月主舎龜六

古原の藤人ふりて梅哉

一雨亭斗衡

上浦急乃漸風きく田子神所

松柯亭葛人

樽拍子や漕入る田井の窓永

竹陽亭杖老

之保は見え無け白波社の月

月太良悟泉

川舟の急也車と戦ふ紅麩の

雪屋人月巢

國み居やま山路の松

歩里亭掬斗

梅の草子鞠子乃宿の巻多し

月漣舎巴明

床み紫奇人宿借新巻終り

橋舎欄挑壺

藤の枝や花をながし七塔の松

孤名盧居逸

小刺降 心きき 勅のち山田也明

くちよき 於 隆河 其 國の 宿を
影よと ちよて 年よ乃 從 残り 一 筆
天明 卯 未 吉 後之 今 皆 古人
とよ 不 察 也 解 道 悉 了 可 也
宿 中 一 記 せし 亦 溪 多 鳴 呼
矣 の 一 一 心 一 一

観 心 家 文

早 暮 終 亦 心 未 可 也

孫 向 林 文 子 了

六十 進

壽家方人平初度

七

家

七

林巴静謹書

三才人巴所雅為之風雅の

を中若神の

東より西海は清み

節を度て

七

浦

王様
入
根
一集

癸巳夏日

阿用
印

